一、表門神社の由緒

当社は延喜式内表門（ウヘト・ウワト）神社であり、御祭神は、アマテラスオホミカミ天照大神、ウカノミタマ倉稻魂
ニギギノミコト邇邇杵尊、の御三座にして御崎大神といい、明治五年に郷社に列せられた。

人皇七代孝靈天皇の御代の御鎮座にして住古は上戸村といったこともある。

人皇七十二代白河天皇の永保元年（1081年）（平安時代）主上お悩みあらせられ詩時、たまたま神主上洛中にて、占いの名挙、洛中に高く御所に召されて、御占いの上祈念の所、たちまち御平癒あらせられ、叡感斜ならず、社頭並びに五十一の末社まで御造営の上、空海筆になる梵字の文珠画像を御寄進せられ、併せて市川の郷を神領に賜り勅願所と認められ、それより、市川明神とも称せられた。

現在の市川大門町は社前に続き、東西約一里を隔てた所にある、上の大鳥居と下の大鳥居の地名は、当時を物語るものである。

これより後、学びの途の神として、御神徳湯愈々現れ、俗謡にも「市川文珠、知恵文珠、女にや針、男にや硯墨筆」と歌われて今日に至っている。

二、例祭と行事

嘉保二年十月（一〇九五）形部三郎義清（甲斐守に任官）故あつて配流当所に住居し表門神社を鎮守とした。その節、御崎大明神を義清宅に迎え、神樂を奉納す。これを御台所祭りといい、現在年々行われている。正月初の酉の日の御神樂は、これに起因している。又、表門神社は甲斐源氏の産土神とも言われていたが、下つて武田信玄甲斐の四方に鎮守を定めるに当たり、当社を南方の鎮守と定め兜の前立の不動を寄進し神領を増し尊崇篤く、更に天正十年三月徳川家康甲斐入国の節は当社に本陣を置き、武運長久を祈願し、天正十一年四月十九日には近隣六ヶ村にわたり、先規により貫高の朱印を寄進し、慶長十四年三月三日第一回の社殿造営が完成した。

現在行われている例祭はこれに起因し新暦のため四月三日、近年は四月第一日曜日となつた。

この例祭には、御輿が市川大門町の小御崎神社（末社）への往復とも芦川を渡るので近郷近在より見物が多く、身延線も社営時代には臨時運転をしたものである。

なお、一の酉の例祭は永保元年の酉の記念すべき史実によるもので、正月の第一の酉の日（旧暦）である。（新暦に改められた際、二月の初の酉の日、現在では日曜日におこなわれている。）

また、弘法大師筆の文珠は日本三大文珠の一つとして大和安部の文珠、天橋立切り戸の文珠とともに国宝的存在である。